



第十八回

語り部養成講座

閉講式

八月十九日(土)に、語り部養成講座の閉講式が行われました。いよいよ語りの発表です。受講生は、これまでの練習の成果を、堂々と披露しました。

今年度は初めて参加する受講生も多く、語りという文化に触れる機会を持って頂けたのは大変嬉しく、この経験、勉強した語りを、財産として頂ければと思います。



初めての語りでしたが、とても上手でした！！

夕鶴の里資料館報

平成29年9月20日

第81号
発行 夕鶴の里

TEL 47-5800

満員御礼

「ぐんしん年金友の会連合会」御一行様が八月二十八日から、四日間の日程で来館されました。

福島交通観光のバス四台、最終日の三十一日はバス五台での来館となりました。

語り部ホールに並べたイス、百七十席がほぼ満席になりました。帰りには、「楽しかったです」「良いお話が聞けて良かったです」「お元気で頑張ってください」などと語り部さんに声をかけていました。



まゆの里事業

染め織り講習会終了!

七月九日(日)から四回の日程で行われた染め織り講習会が九月十六日(土)で終了しました。

今年の講習会は、南陽市外からの参加や、初めて参加した方も多く、出来上がりのマフラーを想像しながら、楽しく織っているようでした。

受講生の制作したマフラーは、次の期間に展示しますので、どうぞ、見に来て下さい。

◇展示期間・十月十七日(火)～

三十一日(火)

※月曜日休館

◇展示会場・夕鶴の里



完成しました♪♪



お知らせ

第43回

南陽市芸術祭 芸能フェスティバル

十月二十二日(日)にシエルターなんようホールで開催されます南陽市芸能フェスティバルに、今年も民話会ゆうづるより堀敏子さん、戸田節子さん、渡邊記美子さんの三名の方が出演します。

入場料は五百円です。

是非お越ください。

夕鶴の里 昔のあそび

九月十六日(土)夕鶴の里「昔のあそび」が行われました。

今回は「折り紙でくすだまを作ろう」でした。十二枚の折り紙を組み合わせての作業で、途中戸惑う場面もありましたが、出来上がった瞬間、「できたくー!!」と歓声が上がりました。



2. 文化を築く絹の道 蚕が歩む新たな道

桑と蚕によって生まれる絹は、美しい光沢としなやかさを持つ天然の繊維です。絹の成分は「セリシン」と「フィブロイン」という2種類のタンパク質。セリシンは、繭の糸をつなぐ糊の役割をしますが、粘り気が糸の品質に係ることから、後の工程で洗い落とされます。そのため残ったフィブロインが、絹の光沢や手触りの正体。絹が通気性や吸湿性に優れているのも、フィブロインが空気や水蒸気を通しやすい性質を持っているためです。

タンパク質は、アミノ酸が連なった鎖のような構造をしています。フィブロインを構成するアミノ酸のうち最も多いのは「グリシン」という成分。グリシンには睡眠の質を高める作用があるとされ、「食べるシルク」として栄養補助食品（飲料）の原料にも利用されています。また、絹は人体となじみやすく、医療の現場でも手術の縫い糸などに用いられてきました。他にも人工血管や人工皮膚の応用研究が進められ、実用化へ期待が高まっています。

さらに近年は、蚕を「昆虫工場」とする研究も見られます。

これは蚕が2種類のタンパク質を大量に作る特性をいかし、体内で医療や工業に役立つタンパク質を合成しようというものです。また、セリシンが持つアトピー性皮膚炎の抑制効果に関する研究も行われています。

(1) 蚕のカラダ



糸を吐き始める「熟蚕」の体内は「絹糸線」と呼ばれる絹の原料（水あめ状タンパク質）を入れた袋が大きく膨らんでいる。絹糸線は短波気質を作り、ためておく役割があり、そこから続く「吐糸管」で一本の糸（繊維）になります。

(2) 蚕の単位は「頭」



蚕は昆虫ですが、牛や馬などと同じ家畜動物です。そのため、「匹」ではなく「頭」で数えます。

(3) 蚕の蛹 ♂と♀



蛹になると雌雄の違いがよくわかります。幼虫も蛹も♀は♂より大きい。左が♀、右が♂。

(4) 繭の構造



絹糸の原料である「まゆ玉」は、タンパク質繊維の「フィブロイン」が約70%、粘液状の「セリシン」が約30%で構成されています。（左図）「まゆ玉」から絹糸を紡ぎ出す女工は、一日中、手をお湯につけているにも関わらず、なぜか、その手はツルツル、すべすべしているそうです。

それは、まゆ玉を絹糸にする時につけているお湯に、まゆ玉から染み出たセリシンが、女工の手を包み、保湿しているからだと言われています。

(5) 「お蚕さま」と呼ばれる蚕

その愛称には、私たち人のためだけに「生きる姿を、敬い慈しむ気持ち」が込められているようです。

私たちも「みんなのために何をするか」という目線を持って、家庭で・地域で・職場で、自分を磨きあげよう・・・。